
19世紀後半のドイツにおける、アルブレヒト・デューラーをめぐる芸術論

—ヘルマン・グリムを中心に—

三井麻央（岡山大学）

本発表では、ドイツ・ルネサンス期の芸術家であるアルブレヒト・デューラー（Albrecht Dürer, 1471-1528）が19世紀後半のドイツでいかに受容されていたかを、ヘルマン・グリム（Herman Grimm, 1828-1901）の芸術論を中心に考察する。

周知のようにデューラーはドイツを代表する芸術家であり、存命中から現在に至るまで、ドイツにおけるその名声は絶えることがなかったとさえいわれるほどである。デューラーを称賛する方法は、時代や受容者の立場などの条件により大きく異なるため、人々がいかなる根拠でデューラーに名声を与えるかを考察することは、デューラーだけでなくドイツ美術そのものに対する受容者の価値観を相対的に明らかにしうる。

なかでも発表者は、19世紀後半のベルリンにおけるデューラー受容にひとつの大きな転換点があると考ええる。19世紀後半のドイツでは、1871年に成立する帝国統一をめぐって社会的混乱の生じる一方で、美術館や芸術家協会の設立が相次ぐなど、造形芸術の領域においても大きな変化が起きていた。この時期にもデューラーは、記念碑の制作や祝祭の開催、新聞や雑誌での批評をとおして崇拜ともいえるかたちでもっとも盛んに受容される。その際デューラーという人間自体が作品を差し置いて「模範的ドイツ人」として称えられ、ナショナリズムを扇動する役割を担わされはじめたために、これら一連の受容は主に、ナショナリズムの高まりと関連づけられて解釈されてきた。

ベルリン大学で美術史の教授をつとめたグリムもまた、実証主義的な美術史研究の黎明期においてなお、ロマン主義的な人物評価にもとづく美術史を著したために、ナショナリズムの文脈で芸術家を評価した典型的な人物と位置づけられる。グリムによるデューラー論『アルブレヒト・デューラー』（1866）はこれまで詳細な考察がなされてこなかったが、その著作においてグリムは、デューラーをもっとも「ドイツ的」な、すぐれた「人間性」をもつ人物であることを理由に称賛する。さらにその際、芸術家を芸術家たらしめる当のものであるはずの作品は副次的なものにすぎないと捨象している。このような芸術家の「人間性」を評価する姿勢は、グリムの後任としてベルリン大学で美術史を担当したハインリヒ・ヴェルフリン（Heinrich Wölfflin, 1864-1945）の様式論と比較されながら、批判的に扱われてきた。

たしかにグリムの芸術論はヴェルフリン以前の世代のものである。けれども一方でグリムは、芸術作品の複製画像と投影機を自身の講義に導入するなど、捨象したはずの作品の有用性を積極的に理解し主張するという一見矛盾した側面ももつ。ここで改めてグリムのデューラー観を、ヴェルフリンと対照的なものとしてのみならず新たに検討しなおすことにより、19世紀後半、ドイツ美術史は人々にどのように理解されていたかということの手がかりとすることが本発表の目的である。